震災支援派遣報告

5月1日～5月7日　仙台

荒川新聞

発行責任	執行委員長
編集責任	教育宣伝部
東京清掃	労働組合
荒川支部	

2011年6月25日
第6号

被災地へ出向して

小林　豊

私は5月1日から一週間、荒川区を代表して被災地へ出向しました。

赴任先は仙台市若林区です。

ここは甚大な津波被害を受けた所で、ニュースで幾度となく映像を見ては心を痛めていました。

宿舎を出てしばらくは何の変哲もない風景でしたが、有料道路を境にガラッと激変し、遥か遠くまで見渡せてしまう現状に、とても言葉では言い表せないほどのショックを覚えました。

本当の本当に跡形もなく、震災前の情景がまったく想像できませんでした。

現場に到着しましたが、何から手をつけたらいいのか分からなくて、ただ、散乱する泥まみれの家財道具をひたすらに運び出し、収集しました。足元がぬかっていて思うようには身動きがとれないので、作業はとても大変なものとなりました。

何日目かに被災者の方と話す機会がありました。

その方は家も車もすべて流され、この先どう生きたらいいのか不安だ、と途方に暮れていました、私には掛ける言葉も見つからず、情けない気持ちでいっぱいになりました。そんな私に「ごくろうさん。ありがとう」と何度もお礼を言ってくださり、胸が熱くなりました。

ほんの一種間ほどの作業ではありましたが、貴重な経験を積むことができました。

いまだに終わりの見えない被災地ですが、これからも自分ができる限りの支援をしていけたら、と考えるとともに、一日も早い復興を心からお祈りいたします。

災害支援に参加して

田崎　豊

荒川支部を代表して仙台市への災害派遣に参加して来ました。

宿舎に着き現場に行くまでは、ここのどこが被災地なんだろう？、と思うほど何ともない普通の町並みが続いていました。

しかし、仙台東部道路を過ぎた瞬間、一気に視界が開け、テレビでみる被災地そのままの、見渡す限りがれきの山の風景が広がっていました。

指示された現場に到着しましたが、何もかも津波で泥まみれで、一体、何から手をつけて良いのか途方に暮れてしまいそうでした。

家具、服、食器、本、靴、などなど、地震が起きるまで今まで普通に暮らしていた家族の財産、一切合財がすべて泥まみれになっていました。

とにかく、目の前にあるものを必死になって清掃車に積むしかありませんでした。

「どこまでやればいいのか？」

「どこまでやれば終わるのか？」

先が見えない毎日でした。

わずか一週間ではとても終わる話ではありません。

「これからどうしたらいいのか？」

「ここに住んでいた方たちはこれからどうなるのか？」

これで終わりではなく、これからも継続して支援を続けていかなくてはならない、と強く思いました。